

ポストB R I C s の一角として注目されるチリ経済

～ コッパーの国際価格高騰で銅輸出が大幅に伸びる ～

2006年 8 月14日 (月)

B R I C s 経済研究所 代表 門倉 貴史

E-mail: postbrics@yahoo.co.jp

～ 要 旨 ～

過去15年の平均成長率が+5.6%に達するなど、チリは、経済が不安定な南米諸国のなかにおいて、突出して高い成長を続けている。2005年の実質GDP成長率は前年比+6.3%、2006年1～3月期は前年同期比+5.1%となった。内需と外需がそろって、高成長をけん引している。

各種の天然資源も豊富だ。とくに、銅については世界最大の生産国となっており、全世界生産量の4割近くのシェアを占める。世界最大規模のエスコンディダ銅山やチュキカマタ鉱山などがある。近年では、中国やインドなど成長著しい有力新興国の需要拡大で銅の国際取引価格が急騰しており、チリは、銅の輸出によって多額の外貨を獲得している。

これまで好調に推移してきたチリ経済であるが、足元ではインフレ懸念が強まってきている。消費者物価指数 (IPC) は2004年の後半から上昇傾向が鮮明となっており、2006年7月は前年比+3.8%の上昇となった。インフレを懸念するチリ中央銀行は、2004年9月以降、徐々に政策金利を引き上げてきている。2006年7月にも0.14ポイントの利上げを行い、足元の政策金利の水準は5.14%となった。

金融引き締め政策によって懸念されるのが、これまで景気を押し上げてきた個人消費や設備投資といった内需のスローダウンである。すでに、自動車など一部の耐久財消費には減速の兆しが出てきている。

一方、輸出のほうは高い伸びが続いており、これが経済成長率を押し上げている。銅の国際価格高騰を受けて、銅の輸出金額が大きく伸びているためだ。しかし、2006年8月には、エスコンディダ銅山で、2000人を超える労働者が賃上げを要求してストライキに突入した。この影響で銅の生産量は大幅にダウンしている。ストライキの影響で銅の生産減少が長引くことになれば、銅の国際取引価格にも無視できない影響が及んでくるだろう。エスコンディダ銅山には三菱商事や日鉱金属、菱マテリアルなど日本の商社や素材各社も出資しており、日本における銅取引価格にも影響が及ぶ可能性がある。